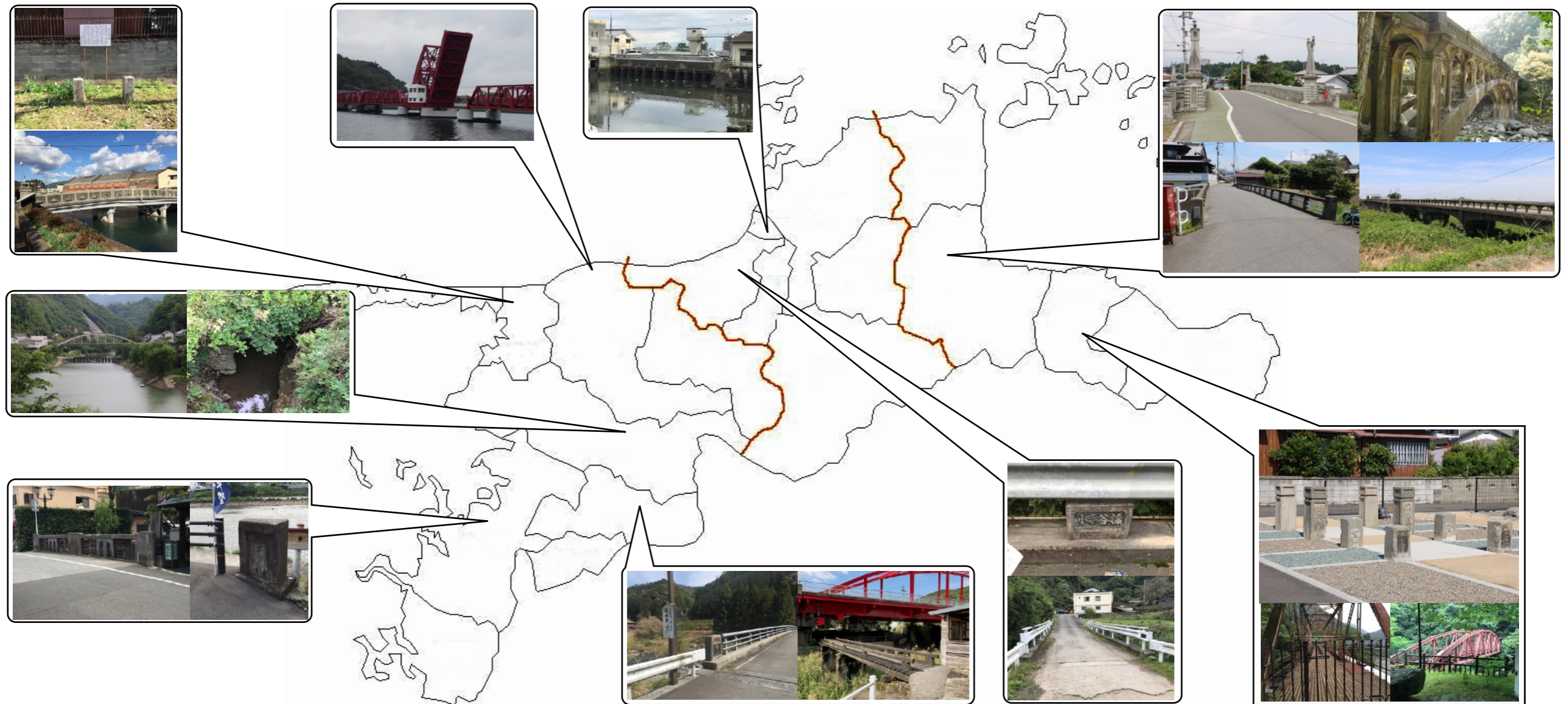


# 「えひめの記憶」を今に伝える橋



川や谷、海といった自然は、人々が自らの足で移動できる範囲を限定していたとも言えます。人々はこの不便さをなくすため、木や石などを用いて『橋』を架けていきました。橋は、人々が他地域の人や物と出会い、交流し、文化を生み出すきっかけになったとも言えるでしょう。

今回は、「ふるさと愛媛学」の取材を通して撮影した写真とともに、それぞれの橋の歴史を紹介します。橋とともにあった人々の暮らしを思い描きください。

# 共存・共栄橋

昭和6年（1931年）に完成した昭和通りに架けられた二つの橋です。住友の各会社と地域社会が共に発展することを願い、別子銅山の最高責任者であった鷺尾勘解治により名付けられました。

昭和2年（1927年）に鉱量調査を実施した際、別子銅山の鉱脈があとわずかで尽きるとの結果を得ました。鷺尾は、別子銅山が約240年もの間経営することができたのは、地域社会の協力のお陰であり、たとえ銅山がなくなっても、地域社会が荒廃しないようにと、新居浜の後栄策を次のように提言しました。

- ① 新居浜の港造りと、海岸の埋め立て
- ② 埋め立て地に、銅山に代わる諸事業（化学・機械等）を興す
- ③ 都市計画を樹立し、幹線道路（昭和通り等）を整備する

鷺尾は、「企業は、利益追求が目的であるが、企業の利益だけに走ってはいけない。地域社会や労働者と共に繁栄しなければ、企業の繁栄も永続もありえない。」と、企業と地域社会の「共存共栄」という理念を示しました。

鷺尾は、その理念を永久に語り伝えるため、昭和6年に竣工した昭和通りに架かる橋に「共存橋」「共栄橋」と名付けました。橋の改修で初代の橋柱は、それぞれ広瀬公園に保存されていましたが、平成27年（2015年）2月に自彊舎跡地の整備に伴い、菊本の地に移設しました。

## 【所在地】

○ 愛媛県新居浜市菊本町1丁目6-14（自彊舎跡地公園内）



## 打除鉄橋

### 【所在地】

○ 愛媛県新居浜市立川町707-3 (マイントピア別子内)

この鉄橋は、足谷川に架かる橋として、小川東吾の設計施工で、明治24年（1891年）5月に着工し、翌年の明治25年3月に竣工しました。橋長は39.63m。鋼造ポートリング・ワーレントラス構造・組立式で、部材をピンで留める方式のピントラス橋です。ドイツのハーコート社から購入しました。鋼材はドイツのアヘーナー社。平行弦でなく、岸に対して60度の角度で架かっている珍しい橋で、日本鉄橋100選に選ばれています。マイントピア別子の観光鉄道として使用するとき、旧橋がそのまま使えなかったために、床組を新しい橋桁にして形態保存を図っています。



## 四通橋と第四通洞

14番坑道準の海拔156mにある端出場坑口と大立坑を結ぶ輸送路で、明治43年（1910年）に開鑿に着工し、大正4年（1915年）に貫通しました。通洞の延長は4,596m。工事には、インガーソル式圧縮機、フランクリン式圧縮機を動力とする削岩機が使用されました。採鉱場も更に下部へと移行したことから鉱石の搬出は第三通洞から第四通洞へ移り、昭和5年（1930年）には、採鉱本部が第三通洞のある東平（とうなる）から第四通洞のある端出場に移転しました。

その後、筏津下部に向けて、延長5,100mの探鉱通洞が昭和10年（1935年）から開鑿され、昭和17年（1942年）に貫通し、全長約10,000mの大通洞になり筏津坑の操業にも大きく貢献しました。昭和48年（1973年）の別子銅山休山までの間、大動脈として活用された最後の水平坑道です。端出場と大立坑道プラット間には、トrolley電車を走らせていました。

四通橋は、大正8年（1919年）に大動脈の第四通洞に接続したトラス橋として足谷川に架かる橋として開通しました。大正12年（1923年）から全坑水を第四通洞から排水することになり、四通橋の東側に坑水管が通されています。

### 【所在地】

○ 愛媛県新居浜市立川町707-3（マイントピア別子内）



# 小松橋と藤木橋

【所在地】

○ 愛媛県西条市小松町新屋敷

小松橋は鉄筋コンクリート造りの道路橋で、大正15年（1926年）に竣工しました。橋長28.6m、幅員5mで、親柱の上に高々と明かりが付いていて、非常にモダンなデザインが目を引きます。下の写真では見えにくいのですが、桁と桁を結ぶ橋桁はアーチのようなデザインになっています。現在、小松の市街地を通る際にはこの橋を渡りますが、この橋の完成以前は少し北側に架けられている藤木橋を通して人々は小松の町を往来していました（ただし、現在の藤木橋は昭和43年〔1968年〕に竣工）。下図は、平成28年度「ふるさと愛媛学」地域調査において、地域の方々からの聞き取り調査をもとに作成した昭和30年代前半の小松の町並み再現図です。このルートは金毘羅街道や遍路道でもあり、道路沿いの各所に道標が建てられています。

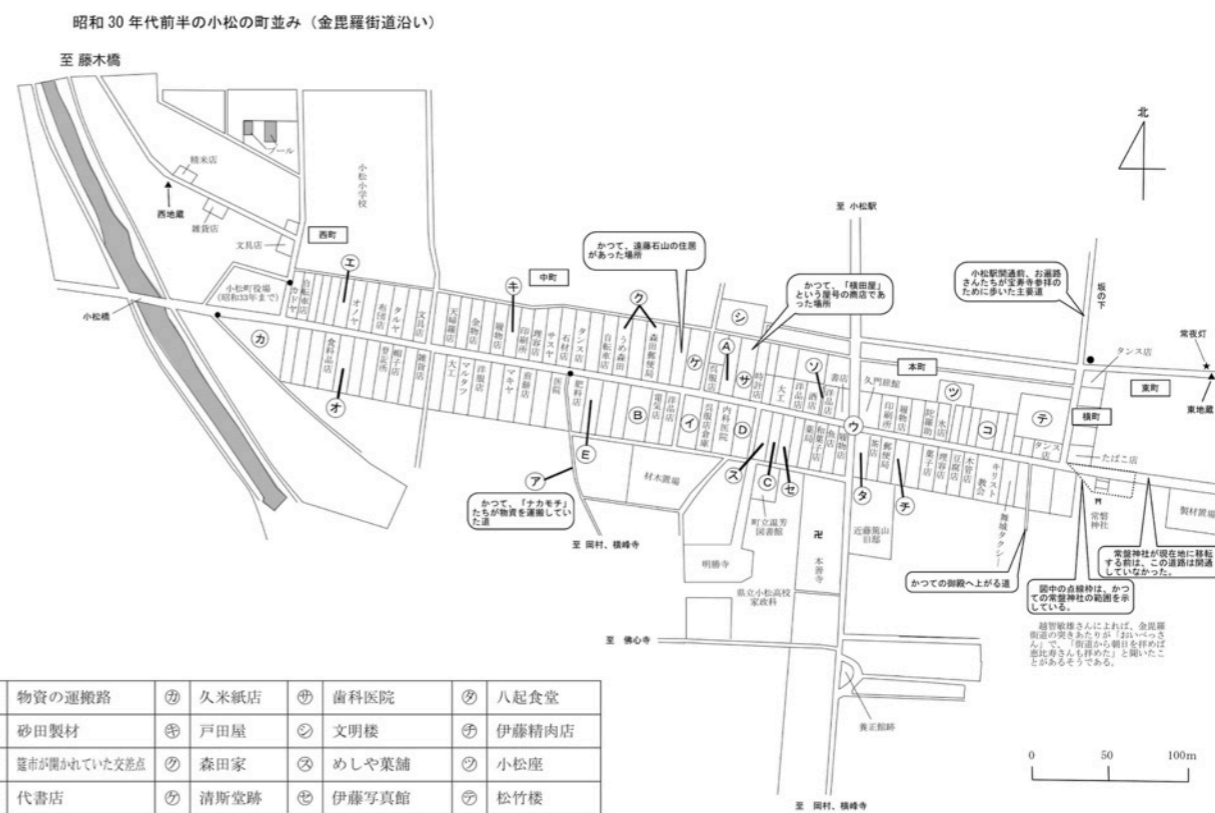
西条市小松町を訪れた際には、小松橋のデザインを楽しむとともに、かつての主要ルートを歩いてみてください。下図や古い時代の地形図を見ながら歩いてみると、小松の歴史を感じることができます。



藤木橋



小松橋



# 中山川橋

【所在地】

○ 愛媛県西条市小松町新屋敷

松山市から国道11号を新居浜市方面へ進み、伊予小松駅前交差点を越えた最初の信号を左折してしばらく行くと、中山川橋に到着します。

昭和3年（1928年）に竣工した橋で、橋長が157.5m、幅員が4.9mあります。現在は2 tの重量制限となっており、橋の入り口には石柱が建てられ、1台ずつしか車が入れないようになっています。地域の方にお話を伺うと、かつてはこの橋が小松町から旧西条市の市街地へと向かう主要道で、バスも往来していたそうです。昭和初期に作られた建築物は、欄干にしる橋脚にしる意匠が凝らされていて、芸術的であると感じます。通るもよし、眺めるもよし。石柱の間を車で通るときにはヒヤヒヤしますが、ぜひ訪れてみてください。

そしてもう一つ。中山川橋に向かう途中、新屋敷の住宅街を抜けて田園風景が広がり始める辺りで右に目をやると、石碑が小さく見えます。この石碑は「小松藩お舟庫跡」に建てられたもので、次のように刻まれています。

「池原利三郎翁 御舟奉行役

諱盛義・通称利三郎其松と号す、近藤篤山より儒学を修む。槍術に長じ、沢郷生野に敗るるや田岡俊三郎と共に長州に送る。廃藩と同時に小松藩の財産を政府に奉還すべき七百町歩の山林が町民の手に遺されたのは、全て池原翁の功績による。明治の初、県会の議員となり、又初代の戸長であった。大正七年九月二十二日没 行年九十一歳」

また、『小松町誌』によると、藩主の参勤交代の際には参勤団100名余の行列に次いで、見送りの家臣等が続いたそうです。そしてここから「欄干丸」という小船に数人の近習の者と乗り、お召し船に向かったそうです。中山川橋があるこの地付近は、江戸時代から現在までの小松町の歴史を学ぶことができる大切な場所なのです。



# 大宮橋

大宮橋は、石鎚登山ロープウェイ乗り場を経て、さらに進んだ所にあります。昭和2年（1927年）に建設されたこの鉄筋コンクリート開腹アーチ橋は、山奥のあまり目立たない場所に架かっているにも関わらず、芸術的で美しい橋です。

この美しい橋が人がほとんど訪れない山奥に架けられたのは、瀬戸内海側の西条市から四国山地を抜けて太平洋側の高知県へ至る幹線道路の一部として建設されたからです。ルート上には大宮橋以外にも鋼トラス橋である千野々橋（大正14年〔1925年〕）、RC充腹アーチ橋である河口橋（大正14年〔1925年〕）などの古い立派な橋も現存しています。

この幹線道路は、明治から戦前にかけて別ルート（現在の国道194号）との誘致合戦があり、地元の熱烈な誘致運動が行われましたが、残念ながらその戦いに敗れてしまいました。

普段見ることのない橋ですが、「愛媛県から高知県へ道を」という建設の歴史を感じられる場所なのです。

## 【所在地】

○ 愛媛県西条市西之川乙127



# 小手谷橋と兜谷橋

これらの橋の名前は、南北朝時代の武将新田義治に関わりがあります。愛媛県伊予市大平四ツ松にある新田神社（国道56号沿い）の社記に以下のことが記されています。

「脇屋義助の子である新田義治は、南朝の長慶天皇の御代、建徳元年（1370年）5月に伊豫の国に来て、6月13日に大平村で罹病にかかり（マヽ）45歳で没した。社殿から120mばかり離れて墓所がある。死に臨んで弓矢を流し、甲冑を埋めさせたという。そのため兜谷、冑谷（よろいたに）、小手谷、弓矢が淵などの地名が今も残っている。」

国道56号を南進して大平交差点を過ぎると左側に「G-factory」というお店があり、その向かいに鳥居が見えます。これが新田神社です。鳥居付近に「新田義治の墓」と書かれた案内板が設置されていますが、墓自体は個人宅の敷地内にあるので気を付けてください。

新田神社から国道56号をさらに南進すると、国道沿いに大南小手谷集会所と小手谷橋が、国道から東の予讃線側に進んだ所に兜谷橋があります。住宅地図に地名が記載されているので、確認してみてください。

## 【所在地】

○ 愛媛県伊予市大平





# 夫婦橋

旧松前町の中心部である本村と新立とを結ぶ橋で、秋祭りの際には本村側・新立側双方から出された神輿の鉢合せが行われることでも有名です。『松前町誌』には、夫婦橋に関する古記録が掲載されています。

「明治31年（1898年）9月10日、県費を以て大字浜新立・本村間にある娉橋の永久的大改修をなす。工事は関係者たる我地元村に於て引受本日着手し、翌32年1月竣工す。此請負金高貳千八百七拾七円余なり。本工事は、行通頻繁なる県道に当たると海水侵入の恐れある箇所なるため難工事なりしを以て、現場より十数間東に假道路を設けて人馬を通し且つ海水の侵入を防ぎ工事を施工したり。（『松前町沿革史稿』）」

「大字浜を貫通する国道に架設しある娉橋と大字筒井より北河原に通ずる里道の間を流る国近川に架しある千石橋と共に石造にして、前者は県費を以て築造し、後者は民費を以て架設せしものなり。（『郷土誌松前村』）」

昭和18年（1943年）7月の大洪水で流失したので木橋を架設し、次いで昭和27年（1952年）3月に現在のコンクリートの永久橋になりました。これには排水のための扉門が付設していて、昭和50年（1975年）に新夫婦扉門が設置されるまで使用されていたそうです。なお、旧扉門の開閉は自然開閉及び手動でした。

## 【所在地】

○ 愛媛県伊予郡松前町浜（県道22号沿い）



# 長浜大橋

長浜大橋は、一級河川「肱川」の河口に架かる現役で動く我が国最古の道路可動橋（バスキュール式鉄鋼開閉橋）で、平成26年（2014年）12月10日に重要文化財に指定されました。この橋は船運から陸上交通への転換を洞察し、愛媛県を事業主体として、増田淳事務所の設計により、1年10か月の工期と当時の金額で29万円という巨費を投じて昭和10年（1935年）8月に県道橋として完成しました。地元では、「赤橋」の愛称で親しまれています。

橋の長さは232.3m（河川改修により6.3m延伸）、幅員が5.5m、五つのトラス桁と可動部桁1径間、対重径間桁1径間の計7径間の鋼橋からなっています。右岸から3径間目が可動部で、可動桁の長さは約18mです。約54tの可動桁をスムーズに動かすために、橋上に約82tのカウンターウエイトを載せています。これが、一種の分銅、つまり、オモリの役目をして開閉の作用を軽くする構造になっていて、15馬力の電気モーターで稼働します。

戦時中はグラマン機の機銃掃射を受け、トラス部材にその傷跡を見ることができます。現在は船の往来がなく、開閉の必要性がなくなりましたが、毎週日曜日に観光向けと定期点検を兼ねて開閉を行っています。

## 【所在地】

○ 愛媛県大洲市長浜（国道378号沿い新長浜大橋の南側の橋）



# 朝汐橋

朝汐橋公園は、フジグラン北浜店の東側にあります。そして「朝汐」とは、八幡浜出身の大関、初代朝汐太郎のことです。

初代朝汐太郎が八幡浜浦に生まれたのは、元治元年（1864年）のことです。幼名を増原太郎吉といいました。力業で怪童ぶりを発揮していたそうです。明治14年（1881年）、力士朝嵐に従って大阪に行った彼は、押尾川部屋に入門して四股名を「朝汐」としました。

明治22年（1889年）秋、東京大相撲の初代高砂浦五郎を頼って上京し、同26年（1893年）1月には東関脇に昇進、さらに同31年（1898年）には横綱小錦とともに東正大関に上りました。大関としての在位は足かけ6年、10場所に渡りました。

伊達家から拝領した竹に雀の化粧廻しをつけ、明治33年（1900年）に故郷に錦を飾ります。大黒屋新田で相撲興行を行いました。埋立工事が完了したばかりで観客の往来が不便であったことから、仲間に声をかけて一夜にして丸太橋を架けます。その3年後、彼の恩を忘れなかった地域の人々によって石橋が架橋され、彼の四股名に因んで「朝汐橋」と名付けられました。初代朝汐太郎は、明治42年（1909年）に引退して年寄佐野山を襲名、幕内在位19年、優勝2回の成績を残しました。

現在朝汐橋公園には、「石橋の橋脚」と平成5年に八幡浜史談会によって設置された「朝汐橋跡」と刻まれた石碑、「初代大関朝汐太郎碑（表に文字、裏にレリーフ）」が設置されています。川は埋め立てられ、往時とは風景が様変わりしていますが、確かにこの場所に橋が架けられていたことと、朝汐太郎の業績とを後世の私たちに伝えてくれています。そして地名。八幡浜の人々は、彼の業績を忘れないため、「朝汐橋」を地名として残しているのです。

（参考：朝汐橋公園設置の説明板、『八幡浜市誌』）

## 【所在地】

○ 愛媛県八幡浜市北浜1丁目3-37（朝汐橋公園内）



## 美名瀬橋と旧東洋紡績赤煉瓦倉庫

美名瀬橋の歴史は川之石発展の歴史でもある。

明和年間に和田新田（いまの和田町）、寛政年間に向新田（いまの保内中あたり）が埋立て造成され交通往来の新しい橋が望まれた。川之石湾口近く、満潮時の舟による運送に便利な、長さ20間（約36メートル）の無杭橋が作られた。

橋台の梁木にはね木をのせてせりだし、強度を保つ継行桁材の太鼓橋。木の力の組み合わせによるバランスを皆勢橋と名づけた。庄屋二宮盛尊のもとで村民一致協力の賜物である。ときに、弘化元年6月のことである。

- ・ 明治20年 架け替え。
- ・ 明治38年 修繕。
- ・ 明治43年 架け替え。

「美名瀬橋」と記す。花崗岩の橋脚で総ヒノキ堅材使用。

- ・ 昭和8年 架け替え。

4月9日開通。鉄筋組立、スラブコンクリート造り。

東洋紡績工場の赤レンガと潮の満ち干に映る姿が水面にゆらぎ、折り折りに姿を変える美名瀬橋。

- ・ 平成11年3月大改修完成。新しい時代を予告させる。

（美名瀬橋付近に設置された解説板より）

### 【所在地】

○ 愛媛県八幡浜市保内町川之石（保内中学校付近）



## 宇和街道の石橋

国道441号を野村町の市街地から宇和町方面へ向かい、旧パチンコ店の所で国道から離れて真っ直ぐ進むと上の写真のような風景が見えてきます。この川は肱川で、川沿いに走る道は宇和街道というかつての主要道でした。石橋はこの付近にあり、野村町教育委員会が説明板を設置しています。

「昔、郡制が定められて、宇和に郡役所が置かれ南予の中心となり、野村地方の文化はこの橋を往来することによっても育まれ、今日の歴史をつくっています。

郡制が定められてから久しく、その当時の橋か定かではないが、いくたびは修復したとしても、今に往時の姿を残しており、その時代をしのぶことのできる貴重な文化遺産であります。

近世には宇和島街道もこの橋を起点としていたようです。

なおこの橋は野村町史談会が昭和57年野村町の往還道調査を実施したときに発見して周囲を補修したものです。

昭和63年 3月 野村町 野村町教育委員会」

### 【所在地】

○ 愛媛県西予市野村町野村



# 船戸川橋

この橋は肱川の中流域、肱川・黒瀬川（西予市城川町から流れる）・船戸川（大野ヶ原から流れる）の三川が合流する地点に架けられ、昭和5年（1930年）に竣工しました。

この橋がある坂石集落は、かつては木材積み出しの拠点として栄えた物資集散地でした。ここから筏などに積まれた木材が肱川を辿って河口のある長浜町まで運搬され、長浜港から県外へ搬出されていました。

しかし、昭和34年（1959年）の鹿野川ダム completionにより状況が一変します。旧横林村坂石集落はダム湖の湖底に沈み、船戸川橋も運命を共にしました。また、家屋や役場等は全て標高の高い位置に移転することになったのです。それ以降、「船戸川橋」は渇水期のみ姿を現すようになったので、このことからいつしか「幻の橋」と称されるようになりました。

現在、鹿野川ダムの工事を行なっているので、「幻の橋」ではなく、下の写真程度ですが、常にその姿を現し続けています。真上に下路式鉄骨アーチの「船戸橋」が架けられていますが、「船戸川橋」は上路式開腹コンクリート橋といって、道路面が上にあることが特徴です。橋の様式を比較してみると、「船戸川橋」の方がデザインがとても美しいと勝手ながら感じてしまいます。

ぜひこの地を訪れていただき、橋の勇姿をご覧いただきたいと思います。

## 【所在地】

○ 愛媛県西予市野村町予子林



# 穂積橋

この橋は辰野川に架けられた橋で、昭和5年（1930年）に竣工し、同年4月14日に新築落成式が行われました。この橋名は、宇和島市出身の民法学者穂積陳重氏にちなんで付けられています。以下、紹介します。

## 【穂積陳重氏（1855～1926）】

穂積陳重氏は、幼名を邑次郎といい、宇和島城下で生まれました。大学南校（後に開成学校と改称。現在の東京大学）で法律学を専攻し、海外留学生としてイギリスとドイツで合わせて5年間法律を学んだ後、東京大学法学部の講師、教授として学生を指導し、東京大学法学部の基礎を確立してわが国最初の法学博士となりました。また、貴族院議員にも勅撰され、法典調査会主査として民法や戸籍法などを編纂し、「明治民法生みの親」と言われました。陳重氏は、大正10年（1921年）8月に誕生した宇和島市の発足にも尽力しました。その功績を称えて当時の市長から銅像建立の申し出がありました。彼は「仰ぎ見られるより、市民の渡る橋になりたい」と答えて断ったというエピソードが残されています。憲法学者である穂積八束氏は弟、民法学者である穂積重遠氏は長男です。

この橋のたもとにある小公園の中には、「橋名の由来碑」と「穂積陳重の意思を刻む石碑」が設置されていて、現在を生きる私たちに彼の考えを伝え続けています。また、付近には高野長英の隠れ家があり、その石碑の文字には後藤新平氏の書が用いられています。さらに「ほづみ亭」というお店の入り口付近には「高野長英の手水鉢」が今も置かれています。宇和島市を訪れた際には名物の鯛めしを食し、市内を散策しながら、江戸末期から明治にかけての宇和島の歴史を感じてみてはいかがでしょうか。

## 【所在地】

○ 愛媛県宇和島市新町2丁目（ほづみ亭付近）



# 岩松橋

宇和島市内から宇和島道路を南へ進み、津島高田インターチェンジを降りると、津島町岩松に到着します。津島郵便局前に架けられている花本橋と現岩松橋を通過して岩松川を渡ると、昔ながらの町並みが姿を表します。

あまり目立たないのですが、花本橋前をやや南に進んだところに、旧岩松橋の親柱が残されています。この橋は昭和2年（1927年）に竣工し、老朽化のために解体された平成23年（2011年）まで、町内外の多くの人々が往来しました。車で津島町を訪れた場合、昭和38年（1963年）に架橋された岩松新橋を渡り、まっすぐ進んだ所に駐車場があるので、ここに駐車すれば町並みの散策が簡単にできます。注目すべきは駐車場内に設置された5枚の壁画で、岩松の歴史や文化を知ることができます。特に、昭和29年（1954年）に撮影された大ウナギは有名で、同じウナギではないのですが、津島町中央公民館と津島中学校に大ウナギの標本が保存されています。

また、終戦直後に文豪獅子文六が生活していた町でもあり、彼はここでの体験をもとに小説『てんやわんや』を著し、淡島千景主演で映画も製作されました。ちなみに、淡島千景はこの映画に出演した関係から何度も岩松を訪れていて、道の駅「やすらぎの里」の中には淡島千景記念館があります。彼女が所有していたものや貴重な写真などが展示されています。

ぜひ、訪れてみてください。岩松川で獲れるしらうおを活用した食事もありますので、ぜひお試しください。

【所在地】

○ 愛媛県宇和島市津島町岩松





# 梁井原橋

この橋が架けられている場所は武左衛門一揆の史跡の一つで、吉田藩により砕かれた武左衛門の墓石が捨てられた場所であると伝えられています。

## 【武左衛門一揆について】

吉田藩が財政難を打開するために紙座を設け、御用商人の法華津屋に紙の専売権を与えたことが一揆の原因でした。製紙産業に従事する領民の収入が激減し、生活が困窮してしまっただのです。

吉田藩領の百姓武左衛門が浄瑠璃語りに身をやつして3年間にわたり農家を戸別訪問して大一揆を纏め上げ、法華津屋を打ち壊して専売制を改めさせようとしてしました。寛政5年（1793年）のことです。一揆衆は吉田藩の宗家である宇和島藩に訴えるために伊吹八幡神社前の河原に集結し、その総勢は7,500名を数えたと言われています。

宇和島藩は一揆勢の主張を全て認め、一揆の主導者は処罰しないことを約束しましたが、吉田藩の裏切りにより破棄され、武左衛門は斬首されてしまいました。

長い間、武左衛門のことを語ることは憚られていましたが、大正時代に日吉村初代村長の井谷正命氏が彼の業績を発掘して自ら供養を始めたことから顕彰事業が始まりました。その事業は現在も続けられています。

## 【所在地】

○ 愛媛県北宇和郡鬼北町上大野（国道320号沿い）



# 日吉大橋下の木橋

この木橋は土木遺産ではありませんが、往来の主役は別の橋に譲りつつも、現在も人々に活用され続けている橋です。平成28年度の「ふるさと愛媛学」地域調査において、地域の方は次のように話してくださいました。

「日吉大橋下の木橋は昔からあり、昭和30年代にはすでにあっただと思います。この橋は、商店街の方から川向こうに徒歩で渡る時のルートの一つでした。映画館や公民館などに行くときによく利用していました。実は、『案山子』という飲食店の奥には、以前銭湯がありました。私たち商店街側でくらす人々だけでなく、川向こうでくらす人々もよく利用していて、この木橋を渡ってこの銭湯によく来ていました。今は、公民館だった所が集会所になっていて、そこへ行くときなどに、私たちはこの木橋を利用しています。」

下図は、地域の方からの聞き取りをもとに作成した、昭和30年代の下鍵山の町並みの再現図です。これを見ると、ソが木橋、タが銭湯、チが日吉館となっています。日吉館というのは映画館の名称で、当時下鍵山には映画館が2軒ありました（もう一つはテ）。ちなみに、日吉館の閉館後は日吉公民館になり、さらに集会所へと変わりました。

この木橋を実際に歩いてみると、日吉大橋によって光が遮られてふっと暗くなるのと、頭上の日吉大橋のために圧迫感を少し感じました。日吉大橋が完成する前は開放感があったのでしょうか。

## 【所在地】

○ 愛媛県北宇和郡鬼北町下鍵山

